

# 平成26年度 第2回宮城県産業教育審議会開催要項

宮城県教育委員会

- 1 日 時 平成26年6月27日(金)  
午後1時30分から午後4時まで
- 2 会 場 宮城県水産高等学校  
宮城県石巻市宇田川町1-24  
電話 0225(24)0404
- 3 次 第
  - (1) 開 会
  - (2) 開会あいさつ  
宮城県産業教育審議会長  
宮城県水産高等学校長
  - (3) 議 事
    - ① 平成24年3月答申後の水産教育の状況について
    - ② その他
  - (4) そ の 他
  - (5) 閉 会

進行

委員の皆様，本日はご多用のところご出席を頂きまして大変ありがとうございます。開会に先立ちまして，本日の資料並びに日程の説明をさせていただきます。まずお手元の資料の確認をお願いいたします。はじめに開催要項1枚もの，次第と裏面には資料の一覧が記載されております。続いて宮城県産業教育審議会委員名簿，裏面は座席を示しました会場図。次に本日の見学施設及び順路が記載されました1枚ものの資料。次に資料1-1から3-3として宮城県産業教育審議会の近年の審議内容を記載しております9ページの綴じ込み資料。次に別冊資料としまして資料4，パワーポイントのシートをカラー印刷したもの。それから資料5，平成24年3月に頂きました震災からの復興に向けた今後の専門学科，専門高校の在り方についての答申文。次に番号はありませんが資料6として産業教育フェアのパフレット。それから水産高校の資料として学校要覧とパフレット。最後に委員の皆様のみの配布ですが，産業教育審議会意見用紙と記載してありますFAX様式となります。それから東部地方振興事務所様より石巻まるっと高校連携事業についてという資料をご準備頂いております。なお資料の1-1から3-3までの綴じ込み資料につきましては産業教育審議会のこれまでの流れや，専門学科，専門高校の状況についてまとめたものとなっております。本日の審議会ではこの内容について審議はいたしません，参考資料として配布させて頂きました。次に本日の日程についてご説明いたします。配布の要項の次第をご覧下さい。この次第の通りに進めてまいりたいと思います。終了時刻は午後4時を予定しておりますのでよろしくお願い申し上げます。なお，本審議会は配付資料の9ページ資料3-3の通り情報公開条例第19条に基づき公開となりますのでよろしくお願い申し上げます。それでは，ただいまから平成26年度宮城県産業教育審議会を開会いたします。はじめに大泉会長からご挨拶を頂きます。

大泉会長

宮城県の産業教育審議会会長の大泉でございます。開会にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。お集まりの皆様には日頃から産業教育の振興にご協力頂き感謝申し上げます。今年度第2回となります。前回の農業高校に続きまして，水産高校を会場として学校の取り組みついていろいろご意見を拝聴させて頂ければという風に思っております。先月，農業高校へ伺った際には，今までにもまして非常にすばらしい高校として再建されてるなという印象を非常に強くいたしました。本審議会は宮城県の産業教育の振興を図るために，教育委員会からの諮問に応じて調査，審議，答申，提言という形で答えていくものでありますが，とりわけ東日本大震災を受けまして，復旧をいかに進めるか，さらに言えばその校舎の再建等々に関して，意見を申し上げてきたところでもあります。本日会場としている水産高校も被害が非常に大きく，再建が特に急がれているということから答申を先行させてきたところでもあります。委員の皆様と一緒に直接拝見しながら，水産教育についてご報告をして頂きます。それで今日は，水産業の専門家である漁協の方も，それから石巻

の地方振興事務所から岩崎所長さんもお越しを頂いております。本日の主題となっております水産教育の方向性についてご意見を賜りたいという風に思っております。ちょっと余談ではございますが、実は私石巻にですね少し早めについて鈴木次長さんをはじめですね、山内課長さんをお待たせする結果になったんですが、実は私石巻高校の出身でございますが、ちょっと山手の方へ行って石巻高校がどうなってるかなというの見に行ったんです。結構いい校舎になっていて、私が卒業した頃よりも、なかなかその良い環境になったなど。ただ、キャンパスに女子高生が非常に多かったのも、これは昔とちょっと違うなと思って、見てまいりました。お待たせする結果になって申し訳ございませんでした。そんなことでですね、今日4時までと非常に長い時間ではございますがご協力のほどよろしくお願ひしたいと思ひます。よろしくお願ひします。

進行 続きます、本日会場となります宮城県水産高等学校校長亀山勉が挨拶を申し上げます。

亀山校長 校長の亀山と申します。よろしくお願ひいたします。会場校を代表しまして一言ご挨拶申し上げます。本日は宮城県産業教育審議会、大泉一貫委員をはじめ多数の方々のご来校を頂きまことにありがとうございます。本校は平成23年3月に発生しました東日本大震災により甚大な被害を受け、お世話になっておりました石巻北高の仮設校舎から平成24年12月25日に本校に戻ってまいりました。本年度より新時代の水産海洋産業の専門学習を行うために学校改編を行い、2年次から航海技術類型、機関工学類型、フードビジネス類型、生物環境類型、調理類型の5つの類型に分かれます。新たな調理類型への関心から平成26年度入学生149名中女子が27名と例年よりほぼ3倍増になっております。本校の様子でございますが、宮城丸は4月24日に石巻を出航しまして、船内では運航、マグロ延縄実習、水産資源調査、あるいは冷凍・冷蔵技術を習得しまして、寄港地であるハワイではオバマ・アメリカ大統領の出身校の生徒との交流を行い、6月20日に石巻港に帰ってまいりました。次に日本水産学会高校生発表が今年3月に北海道大学で行われまして魚醤の研究発表、東日本大震災後の万石浦の生態研究発表で銀賞、奨励賞を受賞しております。また、空手道競技におきましては本日から福島県の猪苗代で開催されています東北大会に個人組手で2選手、団体組手で出場しております。さらに8月には千葉県で開催されますインターハイに個人組手で出場が決定しております。これから授業参観、施設の見学がございまして、東日本大震災からの復興・復旧、並びに水産教育の現状を見て頂きまして、ぜひご指摘等お願ひしたいと思ひます。以上で挨拶といたします。よろしくお願ひいたします。

進行 次に、本日ご出席の委員の皆様をお手元の名簿順にご紹介させていただきます。

ただいまご挨拶を頂きました宮城大学客員教授大泉一貫委員でございます。

大泉会長 大泉でございます。よろしくお願いいたします。

進行 宮城教育大学教授本図愛実委員でございます。

本図委員 よろしくお願ひします。

進行 石巻市立女子商業高等学校長伊東玲子委員でございます。

伊東委員 よろしくお願ひいたします。

進行 なお、他の委員の皆様はご都合により欠席となっております。続きまして、水産業や石巻地区の産業会に深く関わられ、本日特別にご参加頂きました皆様をご紹介いたします。宮城県漁業協同組合石巻湾支所長阿部拓也様でございます。

阿部支所長 よろしくお願ひいたします。

進行 東部地方振興事務所所長正木剛様でございます。

正木所長 よろしくお願ひいたします。

進行 東部地方振興事務所地域振興部長乗田智央様でございます。

乗田部長 乗田でございます。よろしくお願ひいたします。

進行 続きまして、本日報告を頂く宮城水産高校の職員を紹介いたします。亀山勉校長でございます。

亀山校長 よろしくお願ひいたします。

進行 岡嶋佳治教頭でございます。

岡嶋教頭 岡嶋です。よろしくお願ひいたします。

進行 続きまして宮城県教育委員会の主な職員を紹介いたします。教育次長鈴木洋でございます。

鈴木次長 どうぞよろしくお願ひします。

進行 高校教育課長山内明樹でございます。

山内課長 はい、よろしくお願いいたします。

進行 高校教育課副参事兼課長補佐佐藤健二でございます。

佐藤副参事 よろしくお願ひします。

進行 以上でございます。それでははじめに授業参観並びに施設見学を行います。配付資料に見学施設及び順路がございますので、ご確認下さい。ここからご案内を水産高校の岡嶋教頭にお願ひします。

岡嶋教頭 それではお手元の方に、授業参観、施設見学場所及び順路という資料がございます。最初にですね、この校舎の3階で本校で運航してます宮城丸と同じブリッジを使って、操船実習をするというところをまず見て頂きます。降りてまいりまして別の実習棟がございます。そちらでマリンテクノ類型、船の機関の方になりますけれども、そちらの実習として旋盤実習を、食品化学実験室の方で、漁礁の微生物を調べるところ、これはですね漁礁を短い時間で作っていくという実験を平成19年頃からはじめてまして、だいぶできあがってきたものではあります。いろいろところで報告をしております。それと放射線測定の実験結果ということで、すり身の中の放射線をとということで、これはちょっと時間がかかりますもので、測定したものの結果だけということで見学して頂きます。その後は製造の実習場がありますので、そこでは缶詰や魚の干物等作っていますので、そこを見学して頂きます。その次にですね電動技術室では、本校で運航してます宮城丸のエンジンの実物の3分の1ぐらいのものをですね、実習として練習用に使っておりますので、それを見学いただきます。それが終わります家庭科実習棟で今食品の方で地域の特産商品の開発ということで行っておりますので、そこも見学して頂きます。その後ですねここから約4分くらいのところなんですけども栽培実習棟がありますので、そちらでウニの塩蔵実習というのを見学して頂いて、授業参観とさせていただきます。それでは、移動の方よろしくお願いいたします。

**【施設見学】**

- ①航海計器実習室 ②電気機械基礎応用加工室 ③食品化学実験室
- ④製品加工室と下処理室 ⑤原動機実習室 ⑥家庭科実習棟
- ⑦栽培漁業実習棟

進行 それでは審議に入りますが、配付資料の8ページ資料3-2の産業教育審議会規則第5条により会長が議長を務めることになっておりますので、大泉会長に議長をお願いいたします。

大泉会長 いろんな水産高校の施設それから実習風景を見学させていただきました。ありがとうございます。暫時の時間議長を務めさせていただきますので、皆さんのご協力をまたよろしくをお願いいたします。今日の議題のこれからの水産教育の方向性についてですが、24年3月答申以降の水産教育の状況についてですね、学校現場の先生方から改めてお話を伺った上で今日は委員といっても3人しかいないんですけど、私どもで質問、議論という風な格好にさせていただきたいという風に思います。それでは水産教育の現場の声という事ですがよろしくお願いをいたします。

岡島教頭 それでは最初に学校の概略等について私から説明させていただきます。座って説明申し上げます。まず本校の位置ですけれども、石巻市の東部に位置しております。先ほど見て頂きました栽培実習棟は、万石浦というところに面している学校になります。本校は明治29年牡鹿郡の簡易水産学校として創設されました。今年で118年目を迎えるわけですけれども、校訓は、「礼節を貴び、師長に順うべしと。至誠を本とし、廉恥を重んずべし。忍耐を旨とし、業務を励むべし。」非常に古めかしい、先生に従いなさいとかですね、恥を重んじなさいとか、耐えて働きなさいとかいう校訓です。それがですね大きく変わりましたのが震災後、これをですね全校生徒が唱和するようになりました。やっぱりみんなで協力していかなければだめだという気持ちが芽生えてきたからではないかと思いますが、大きな変化としては校訓を大きな声で唱和するということが行われています。本校ですけれども、日本の中でも水産高校の中で3番目に歴史があるという学校で、平成28年度には120周年を迎えます。それで一番古いのが福井県なんですけれども、ここもですね若狭高校というに変わります。来年度ですかね、もう完全になくなります。あとのこの近辺では宮古水産高校が約1年間本校より長い歴史を持っていますが、三陸沿岸の世界でも大きな漁場というところに位置している水産高校ということで日本の中でも残っているのかなあと思っております。本校も118年の歴史があるわけなんですけれども、とても大きなターニングポイントだなあというのがありまして、今から十数年前なんですけれども、バブル崩壊後、その時の時代背景をみていきますと、少子化、それから一次産業の方の減少というところでこの時期はですね、全国的に水産高校の定員が満たさなくですね、生徒が少なくなりまして学科改編とかが行われた時代です。今から14、5年前になりますけれども、だいたいここで一回大きな転換期がありました。それからまた新たに今になりますかね、本校では今年からまず生徒募集または次の新たな水産教育の展開ということで、学科改編を行いました。学科改編なんですけれども今年の1年生から定員160名、今まではですね、

水産と工業の方で情報の方が1クラスあったわけなんですけども、今年からは水産一本ということで、5つの類型に分けて2年生から進めていくという学校に変わります。この具体的な変わり方については後程また詳しくご説明いたします。そしてまずはあの震災の所からお話しをしたいと思います。石巻地区と言いますと、この辺ではですね非常に死者・不明者が多く約4千名弱の方々が亡くなっております。この石巻の地区の人口比から言うと2.4%と言いますから非常に高い確率で死亡者が出ておりました。その当時の本校の状況ですけれども、3年生が2名、2年生が1名、1年生が1名と計4名の生徒が震災で亡くなっております。被害状況ですけれども、生徒の家等ですが全壊が136件、まあ生徒数がですね381ある中で、全壊が136、流出が20軒、大規模半壊、半規模半壊と含めまして約60%の住宅が無くなったというような状況です。これも地区全体からみましても、水産会社などがありますが、だいたい組合に加盟している水産会社が200社くらい、あと個人でやってる会社が100社くらいありますが、ほとんどの水産会社がやられました。現在3年経ちまして復興できているのがだいたい140社くらいが水産業では復興しているというような状況です。ですのでやっぱり生徒の家庭環境から見ていきましても、お父さんお母さんの就職先がないとか働き口がないとか、そういったところがですね、今でも尾をひいているというような状況にあります。これは石巻市内の状況ですけれども、漫画館がある中瀬というところですが、震災の時はこういう状況でありました。これは本校の駐車場付近ですけれども、ここは津波という形で押し寄せたわけではなく、水位がどんどん上がってきてという状況でした。ですので、中にいた私共は外で何が起きているかわからず、水位だけが上がってきて、津波の影響なんだとは思っていました。ここからもうちょっと1キロでも離れてしまうと、もうそこは津波の凄まじい被害を受けている状況でした。また今行きました実習棟の所が、このように水没していて、見てるとこの屋根があるんですけど、相撲場になってますが、この時はですねみなさんが避難されていて、そのごみの集積場ということで神聖な土俵をですねこういう形で使う羽目にはなっておりました。これは柔道場のそばなんですけれども、マンホールが浮き上がってきてこれ見てた時には、これはマンホールが浮き上がったのかなという風に見てたんですけれども、後々の情報によりますと牡鹿半島が東南東に5.3メートル、地盤沈下が1.2メートルと半島自体がこのように移動していると。それなので本校も70センチから75センチくらいは地盤沈下したのではと考えられております。マンホールがこういう風に上がっていたのがそういった状況です。これは艇庫なんですけども、ここで小型船舶の実習とかカッターの訓練とかいろいろやる起点として艇庫がありました。ここもですね、これはスピカという小型船なんですけれども、本校は小型船舶の養成施設になってまして、免許が取れるというシステムになっております。その練習船ということなんですけども、こういった船がですねどんどん打ち上げられて使えなくなったというような状況でした。これは

もうちょっと大きな船で、20メートルくらいの船なんですけれども、こういう状況でした。これは先ほど見ていただいた実習棟の所ですけれども、これは平成元年から3年かけて作られたものでもう20数年たつて、老朽化もあるんですけれども、震災のためにもう配管等、パイプ等もやられまして、もう今ではほとんど使えてなくて、約2割くらいが水槽として稼働できているような状況であります。今そこにクロソイか何か入れてるんですかね。そうしますと今アオサギが繁殖してまして、アオサギがですね40センチくらいの魚も食べてしまうんですね。カラスより賢いんじゃないかと思っております。これはやっぱりひびが入って水が抜けて使えなくなった水槽で、まあこういうことがですね、今の状況まで変わってきました。これは一番最初に見て頂いた旋盤のものです。これは全部入れ替えになりまして先ほど見て頂きました。続きまして溶接もこういった形です。使えない状況になってきたということです。ご覧のように電柱が傾きまして、この電柱を建直すまで、また安全な時期になるまでっていうのも結構時間がかかりまして、発電機を使って学校内の電気を賄っているという状況でなんとか過ごしてきた状況です。ここはあの道路の方はアスファルトになってましたけども土盛りして高くなって冠水を防いでる状況です。先ほど出ましたところですが、艇庫の方、もう水面下になっております。満潮になりますとですね、海面の方がいつもより高くなりますので、このような形で土嚢という土を入れた袋をずっと沿岸線に置いてですね、流入を防いでおります。低気圧とか等が通りまして、雨量が多い場合とかはですね、5台のポンプで海に排水をするということで渡波地区の冠水を防いでいるという状況です。本校もポンプでくみ出してますけれども、ポンプがちょっと詰まったりするとこの部屋も水浸しでタイヤが半分くらいまでは水に浸かる状況になっております。これはですね、震災後ヘドロが来ましてその中でヘドロは乾燥した後が非常に大変で、粒が細かいもので目地の中に入ってしまう。例えば畳の中に入ったりすると、洗ってブラッシングしてもまだ取れないとか。今度は乾燥するとですね、ホコリになって気管支等を悪くするとか。そういったことですね、石灰によってこういった消毒をしながら、まあなんとか今の状態には至っております。先ほどもお話ししましたがけれども、この状況によりまして、震災後の25年の9月の真ん中の所を見て頂きたいんですけれども、被災した生徒宅の復旧ということで記載しておりましたが、3年経ちました。生徒も入れ替わりました。しかしですね、386名中約4割の生徒は仮設やまた自分の家に住めないというような状況が続いております。ですので、状況としてはですね復旧・復興はしているものの、小学校6年生だった子が今入ってきておりますけれども、状況的には大きな変化は見られないということです。ちょっと紐解いていきますと奨学金を頂いて生活して、学校に来れているという状況も見受けられます。23年度381人のうち236件というということで、ちょっと試算していきますと、未だにですね年間1億円以上、400名弱の生徒に対してですねこういった受給を頂いております。それとですね1年生の家

庭調査をしてますとですね、150名くらいいるんですけどもそのうちの3分の1強は両親がそろっていないというような状況で、こういった石巻の状況を生徒の状況であることを踏まえながらですね、本校のですね水産教育をどういう風に進めていかなきゃならないのか、石巻の産業とですね、今の生徒の中でこういった教育を本校はしていかなきゃならないかという状況になっております。今本校舎に戻りましたが、冒頭に校長の方から石巻北高校舎での仮設の話がありましたが、私たち自体はですねこういった形で実習に今使ったバスと大型バスを利用して、仮設校舎で生活をしていました。ippoippo から頂いたバスは非常に機動力もありまして有効に活用できました。仮設の中でも生徒はですね生き生きと授業に来ていたのではないかと感じております。部活動はこのようにして活動しておりました。石巻北高校はもともと農業高校ですのでこういったところでですね、コラボレーションで稲刈りをやったりとか、水産業と合わせたりということで、現在も高高連携ということで米粉を使ったかまぼことかですねその辺で共有しながら授業とかを進めております。そして進路状況ですけども、生徒の進路状況です。だいたい7割の生徒が就職、3割の生徒が進学です。就職の生徒のほとんどがやっぱり石巻からはあまりでない。ほとんど県内です。県外に出るのは数名ということ。それで進路で大きく変わったところはですね、船関係に進む生徒が増えてきた。これはある見方によると、船の方が収入がいいとか、そういったところにもあるのかなと。そのためには資格を取らなきゃならないとか。そういったところで水産高校の必要性も強くなってきているような感じを受けます。続きまして今年の学科改編の件ですけれども、本校の教育方針である誇りある海洋・情報のスペシャリストの養成を掲げておりますが、これを養成していくためには土壌として何が必要なのかといいますと、やはり実習などで使える環境ともう一つは生徒が勉強したいと思えるような状況を学校が作っていく。どのように作っていくかという、今取り組んでることとしましては、地域連携事業の中で生徒をいろんな企業に見学させて、そしていろんなものを見せる。その中で生徒が自分はどういった方向に行きたいとかというところを、感じさせ、気づかせ、そして目的意識を持たせるというところで取り組んでおります。その中で今回の学科改編では、6次産業化ということで、スペシャリストの養成、いわゆるスキルアップ、それと6次産業の推進というところで多く取り上げております。今年度から新しい類型ができたわけですけれども、この新しく発足した類型は1年生はですね、すべて共通履修で行って、2年生からそこに書いてあります5類型に変わります。航海技術類型、機関工学類型、ここはですねやはり船関係がベースなので、スペシャリストの育成、技術の養成がメインになるのかなと。後は生物環境類型、フードビジネス類型、調理類型。この辺はですね、石巻の復興に合わせた6次産業化、または水産業が低迷している中でその6次産業化を持って水産を復活させるというような視点を持って取り組まれております。それではまず航海類型、今日シュミレーターを見て頂きますけども、そのの

説明をさせていただきます。航海技術類型とは変わりますが、先ほどの艇庫の状況です。1年生はカッター訓練をやります。全般的にですね、だいたい子供達は海が好きだ、海は広くて良いなどだいたいは思ってるんですけども、1回船に乗せると船酔いしてだめなんです。実は海洋教育っていうのは、海に親しむ、海の上において船酔いをしてでも海が好きだと、こういう生徒を作っていくならない。実はそういったところでですね、活躍しているのがこういった実習で、体を動かしながら海の上にいるということは非常に生徒にとっては新鮮な体験であります。これはですね実習の中にマリンスポーツとかですね小型船舶の養成施設として船の免許をとれるとかそういったところを航海類型では取り組んでおります。マリンスポーツという科目ではですね、遊びのように見えますが実はなかなか海に出るのも濡れて嫌だろうし、寒いと嫌だろうし、ということもあるんですけどもこうやって遊びながら海に親しむというのも海洋に結びつけるひとつの教育として取り入れております。これは金具や鉋です。これは先ほど見て頂いたシミュレーターです。これは小型のものも装備しております。今後の取り組みとしては、地域の産業界を生徒に見せて、そして生徒のやる気、目的意識を培ういうところで今後取り組みたいと考えております。続きましてマリンテクノ類型、これも先ほど説明しましたが、船のエンジン部になるところになります。これはさきほどありましたので飛ばしていきます。こういったもので新しい施設が入ってきます。溶接なんですけども、実は石巻にはですね日本でも有数、世界でも通じるようなレッドボートといいまして、巻き網船が巻き網を巻くために使う船とかですね、そういった一流、世界でも優秀な技術をもっている会社が石巻にもあります。そういったところの溶接とかですね、アルミの溶接とか鉄鋼の溶接とかいろいろありますけども、そういったところをですね、学校でやる。そういった企業さんで高い技術を見せて貰う。そして生徒に意識を高めてもらう。こういったところで展開を進めていきたいと考えております。今ですね、省エネの問題で船の方が見直されています。そうしますと港での作業はこうなってきます。クレーンはこういったものを使う。本校ではですね、実際にやってクレーンで操作ができるくらいです。実は世の中で欲しいのは荷物を上げたときに荷物がぶれない、それを下ろしたときに20センチ以内、目的の20センチ以内のところを下ろせる。こういったスキルが必要なわけなんですけども、そういった生徒がですね、こういった職場を選ぶとかいろんなものが職業にはあるよというところを教える上ではこういったことを体験させるということは非常に価値があるわけです。同じくフォークリフトも同じです。これは車の運転と違いましてステアリングが後ろの方にありまして、その辺がちょっと難しいのかなと思われまして。まあ生徒は結構楽しんでやれてます。先ほど見て頂いた原動機です。これは船に乗る前に実習しますので、船に乗った後がですね実習が非常にスムーズにいくということで役立っております。続きましてフードビジネス類型について、説明をいたします。

それでは私油谷の方から、食品化学類型及びフードビジネス類型について説明をさせていただきます。よろしくお願ひします。先ほど校内、実習棟も見て頂きましたが東日本大震災によってですね、ほとんどというか食品製造に関するもの、それから実験に関するものはすべて使えなくなりました。先ほど教頭からもお話がありました。電気も水も復旧しないままでしたので、全部の機械入れ替えということにもなりましたので、すべて使えるような状況になったのは先週です。というところで仮設校舎での実習などはもう限られた所でしたし、県外で実習を受け入れて頂くということもありました。ちょっとごちゃごちゃしておるんですが、青い部分に関しては震災と前のものなんです。実習で行ってですね仮設校舎の方で調理室を使ったり実験室を使ったりということでもかなり方向転換を迫られてしまったということもありました。ただその時にですね、マイナスの発想ではなくてじゃあできることをやりましようってことで、なるべくハードの面の充実よりは、このチャンスにソフト面をきちっとしていきましようということでも発想を切り替えて、専門教育を続けました。そのうちの3つがですね、その黄色の部分になります。先ほど見て頂きました魚醤の研究であったり、それから商品開発をする。商品開発と言っても生徒が考えて自分のアイディアを形にするという作業ですね、といったところをさせる。そしてもうひとつはそこから結びつく知的財産について発想させるということにちょっと力を入れていきたいなと思ってました。それでフードビジネス類型に今年度からになるわけなんです。この不易の部分の赤の上の部分と、それから新しく強い水産物を何度も出していこうというところの部分、流行の部分もきちっと押さえてですね、商業的な発想を加えて実践していければいいんじゃないかということでも考えております。震災前は安全であるということが、まずひとつ水産物、食品の価値だったのかなあと思っておったんですが、私たちがちょっと遅れておまして、安全であるというのは当たり前で、さらにもう一つ付加価値をつけないと売れなくなってきてるというのがありますし、そういったものを発想できる力をですね、すぐに現場では役に立たないかもしれませんが、5年後10年後に役に立てるような人材育成をしようということでも変えていくということです。その中のいくつかを紹介させていただきます。震災後だめになりましたので、まず道具がありませんから紙と鉛筆でできることを考えましようということでも、まず頭の中にあるものをきちっと具現化させる。見せられるようなものにするということでも、その中で導入したのは知的財産教育。まあ言ってみれば創造教育です。そういった所でやっさいこうということでもいろいろ取組ました。実習では仮設校舎の調理室を整備して営業許可を取得して干物の製造を中心に実習をしてきました。干物の製造というのは、魚の理解、それから包丁の使い方、塩蔵であるとか、干すって事に関してもその加工の保存性の付与というところで水産加工の基礎の基礎が全部詰まってるということでも、こういったところをやりました。缶詰は本校で作っておったんですけ

ども、作っておけば売れるような状況だったんですが知名度のないところでいかに売るかということで生徒と一緒に考えていきました。ここで取り入れたのが私も勉強したんですがマーケティングの手法です。生徒に北高の文化祭にきた客層を市場調査させてターゲットを絞って売りたいということでターゲットが買いそうな商品名を考えましょうということで、韓流スターとこういったネーミングも考えながらやっていきましたが、わりとですねこれが上手くいまして、商標というのがなかなか重要なんじゃないかっていうことに生徒も気づきはじめました。私たちもその生徒が考えて商品名を考えるとかですね、パッケージデザインを考えるとということ、これはかなり有効な教育ツールになるだろうということが分かってきましたので、こういった所を少し重要視してこれから進めていきたいなという風に考えております。もうひとつは仮設校舎で始まったものなんですけど協和発酵さんのCSRでですね、研究の助成がありましてこちらの方も手を挙げさせて頂きまして、応用微生物学に挑戦してきました。専修大学や東京海洋大学さんとも協力をしてですね、魚醤の中にいる微生物を探すという所を載せておきました。この研究通して東京で行われました中高生の研究発表会で受賞したり、商品開発の方と組み合わせたところ、先ほどもお話ししましたが、成果が出てきています。さらにですね、もうひとつはおいしいものは作れるということも分かってきましたが、これをいかに消費者に届けていくかということもビジネスとか売っていくという所では重要になってくるということで、そういった所で今までも販売実習をやっておったんですが、前回の販売実習を振り返らせてもう一段良くするにはどうしたらいいかということを生徒と相談してですね、現場で今日は天気がこうだったということを相談させたりして、ワンランク上の販売実習を目指すことで、成長を促すような実習を展開しております。来年度ですね、本格的に専門学習をスタートするフードビジネス類型ですが、今お話したようなことをベースにやっていきます。水産分野の不易の部分、安全で安心な食品を作るということ、それから食文化の保存、そしてそこにビジネスの力を組み合わせて授業を展開したいなと思ってます。中でも自分で考えて実践する力ということを育てるために、学校設定科目として商品開発と知的財産、それから6次産業と起業、会社を興す方の独自の科目を立ち上げて多様化する産業に対応して社会の中で活躍できる人材を育成していきたいという風に考えております。短いですが以上でフードビジネス類型、食品化学類型の説明を終わらせて頂きます。ありがとうございました。

鈴木主幹教諭 生物環境類型の鈴木です。先ほど見た実習場なんですけども、津波は免れたんですけども、地盤沈下が1メートル、それから高潮によってですね取水口が使えなくなってる状況で、取水ポンプの方も動かなくなった状況で実習は全然だめな状況だったんですね。それで取水なんですけども、塩ビパイプを50メートルつなげまして、そして海水を取って、蠣殻を入れてローダリングしながら人工的な採漁をおこないました。それからがれきだったんです

が、先ほど砂浜があったんですけどその所が全部がれきで、それをよけてですね、宮城県漁協の石巻湾支所から、海面を借りて養殖筏を設置したんですね。そこでわかめの養殖とか昆布の養殖をしながら実習をしてきたということです。まず今までやってきたことということであさりとキタムラサキウニということで、あさは万石浦のあさをを使いまして、ただ泥がいっぱい被ってるものですから、そこから親のアサリを作って100万個の稚貝を作っております。それからキタムラサキウニについては東松島市の月浜というところでこれはウニのすごい有名なところでブランドになってるところなんですけど、そこから親を提供して頂いて放流を次の年、平成24年度ですね、まあ毎年やってるんですけども1万5千個くらい作って昆布と一緒に入れて放流したということです。それから震災後ですけれどもホヤが筏など流されて、宮城県としてホヤというのは代表的な水産の種類でありますので、何とか学校でできることはしたいなということで、人工採苗をやってみましたけども、うちの方でも人工採苗については22年度に確立してましたので、女川の伊豆島、それから田代島ということで漁業者の取り組み面の指導をして、生徒と一緒に地域連携を図りながら取り組んでおります。先ほど塩ウニ作りということで、今まで養殖をしてそれを売るというだけではちょっと弱いだろうということで、先ほど加工してた場所は、ダイビングの機材を置いていたところなんですけども、そこを改造しまして加工場を作って、塩ウニ作り、それからワカメということで、6次産業化ということでまず加工、それから販売までを考えています。消費者のニーズに合った物を作る生徒を各浜に送っていかなくちゃいけないんじゃないか、そういう担い手を作っていかなくちゃいけないんじゃないかと思います。今年も25人中2人が浜に戻って、いずれ地域のリーダーとして活躍してくれると思うんですけども、そういう子供達を育てるということで、視野を広げながら考えれる、いろんな角度から考えられるような伝統を作るということで6次産業の取り組みをしております。このほか、ふのり再生プロジェクトということで、今日3年生の生徒なんですけど小竹浜というところにいきまして、漁協の婦人部と一緒にですね磯を掃除して、そこにふのりの胞子がつくような形で今日行っています。3月になったら、婦人部と一緒にパック詰めして交流を図ってるということで地域連携を図りながら授業をしております。あとこれはこの前のサンファン祭りでコンブとワカメを販売したということで、実際に作ったもの、養殖したもの、それから加工したものを販売したということで6次産業化の取り組みをしている状況でございます。栽培漁業、生物環境類型ですが担い手育成ということを考えながら指導していきたいと思っています。

岡島教頭

ついでにサンファンが出てきたものでこれを入れたんですけども本校生徒がスペインの方に2名、職員1名ということで7月23日から31日まで支倉常長の400周年ということで向こうでお寿司を作るということで行ってまいります。続いて最後に調理類型についてですが、今年4月24日に認可さ

れました。なぜ調理類型かといいますと、最近、平成18年からですね、魚よりも畜肉の方がですね消費が多くなってきている。そういった状況の中、あと6次産業の後押しといいますかね、本校で6次産業を取り組んでいくその後押しとして魚食文化を石巻に残していこうと。また震災もありましたし、石巻の町をですね復興させるために、そういった所で調理師を養成してやっていければということで考えております。これに関してはですね、地域連携会議とかでいろいろ話題には出てくるんですけども、サンファンを中瀬に持って行ってそこにレストランを開いて、そしてそこで宮水の卒業生が料理を作る。これもひとつの夢じゃないかとか。そういったことですね、町おこしもいれながら、まあいろいろ考えているというような状況です。内容につきまして、このような内容となる予定です。展望としてはこのようなところで、1次産業の発展に向けてということで、魚食文化を取り入れながらの調理ということで進めていきたいと考えております。以上、本校の活動というところでご紹介させて頂きました。どうもご静聴ありがとうございました。

大泉会長 ありがとうございます。審議はこれだけなんです。情報提供がありますが、引き続き情報提供をせっかく来て頂いてるんでお願いいたします。では漁協の石巻の支所長さん、よろしくお願いします。

阿部支所長 私の方からまず水産高校、地域振興ということでですね、地域への貢献のことをひとつ話をさせていただきます。水産高校、当然震災前から当たり前のように生徒さんが登下校で行き交う姿、それから実習等で沿岸部を移動する姿見て、なんの意識もすることなく平然と生活をしてきたんですが、今回の震災で約2年間石巻北高の方で授業が続けられるということで、非常にその地元がですね閑散としてしまったということです。私たち漁業者もですね生徒さんの姿を見ることがなかなか無くなって、かなりその明るい話題がない中で落ち込むことがよくありました。25年1月ですかね、授業が開始してですね、登下校する姿、それから実習の姿、部活動の練習の姿等、それからこの間で目にする生徒さんも増え、震災でうつむくことが多かったんですけども、癒やしになったというのが地元の声でございます。それから私たち生産者からよく耳にするのが、万石浦で実習のカッターを行き交う姿を見るとですね、うちの生産者の中にもですね、この地を離れてサラリーマンをしたいとかそういう保護者もいました。ただあのカッターでですね行き交う姿を見ますと、この地に残って漁業を続けて良かったということでですね、後押しを頂いてるという形で、この地域には水産高校は貢献してるんじゃないかと思っております。それから水産業への貢献ということでは2つの見方なんですけど、1つ目として、私たちは水産高校さんとはインターンシップ、それから実習等で交流を深く持たせて頂いております。震災後6月ですかね、ここはカキの養殖でも当然有名なんですけど、万石浦、日本で一番のカキの種苗の生産量誇っております。震災当時、自分たちでカキの種苗を確保してた

んですが、例外なく津波の被害を受けましてカキの養殖を続ける仕事が難しい状況に陥りました。当然この牡鹿半島はカキの種苗がございまして、カキの養殖を脈々と続けては来たんですが、種苗すらなかなかということで、万石浦に一度残った数少ないカキの種苗を持って、カキの養殖の継続、それから種苗の栽培をするべくですね、水産高校さんの方からお力添えを頂きまして、カキの種苗筏の作成を続けてまいりました。この取り組みにつきましては平成23年の水産白書の方にも掲載をされております。こういった形でですね水産高校さんからいろいろな面でバックアップを頂いて水産業への貢献を頂いているというのが実情でございまして。それから私たち漁協の取り組みになるんですけれども、いうまでもなく震災復興からですね、徐々にではあるんですけれども、ハード面等の整備を進めながら、それと相まって水産物の取扱量、それから取り扱い業者も戻りつつあります。約7割くらいは戻っているのかなという風な形で考えております。こうした中、私たちが前に進もうという力にですね反発するように、先の暗い話であります、東電の原発問題というのが立ちはだかっております。水産物の生産にあたっては、十分な安全検査を実施して取り扱ってはいるんですけれども、どうしても消費者の受け止め方はかなり温度差があるようです。それが相まって魚介安ということは否めずですね、我々古くから共同販売という形で販売体系を維持してきたんですが、この基本体系を崩さずにですね新たな流通形態を模索する必要があるのかなと考えております。その中で水産高校さんで取り組まれている6次産業化というのもひとつの試みであるということで考えております。6次産業化はなかなかですね取り組み難しいということもあると思うんですが、消費者のニーズをより早く受け止められるということがひとつと、魚介安に対抗できる体力を中間マージンをカットすることによって温存できるのかなという風な形でデメリットだけでなくメリットも多く含まれていくという形で考えております。また、今回ですね魚食の復旧というのは地産地消、並びに消費拡大には、必要不可欠であり我々漁業者もこれからはただものを作るだけということではなくて、食べ方など紹介し、魚食の復旧に取り組まなくてはいけないという風な考えを持っております。今回水産高校さんでは調理類型という風な形で新設されたことは我々が目指す魚食の復旧に非常にリンクしているというふうに考えております。また後押しとなる人に間違いないと確信しております。今後の取り組みといたしまして、今後地域に根ざしたですね産業高校として活躍して頂くことを切に願っているところです。あともうひとつは我々漁業界、高齢化がどうしても避けて通れません。水産高校の方から若い人材をですね育成して頂いて水産業界にお送り頂くというのも期待しておりますのでひとつよろしくお願ひしたいと思います。以上です。

大泉会長

はい、ありがとうございます。水産業の専門家としまして水産高校とそれから漁協との関係について、あるいは水産高校に期待することについてお話を頂きました。ありがとうございます。それから、東部地方振興事務所からは

専門高校が連携して取り組んでる事業があるという風に話を伺ってるんですがその点も含めてお話をいただいてよろしいでしょうか。

正木所長

資料に基づいてこれまでの取り組みについては私の方からご説明させていただきます。私どもは産業振興の分野に属する所管でございますので、産業分野から求められる人材をいかにして高校から輩出し定着するかというところに着眼をしてですね取り組んできたつもりですし、今後もそれに向けてバージョンアップといえますか、常々見直しをしていきたいなと思っておりますので、いろんな形でご助言を頂ければ大変ありがたいなと思っておるところでございます。お願いします。

乗田部長

それではA4、1枚の資料、石巻まるっと高高連携事業についてという資料でご説明させていただきます。高い高い連携事業と書いて高校間の連携事業という意味でこのようなネーミングになっております。事業の目的でございますけれども、地元産業界といたしましては課題として人材不足ですとか、定着、販路開拓などがですね課題として挙げられてるということと、高校生としては地元志向なんだけれども地元企業を知らないとかですね、そのような課題があるということで、高校から地元産業界へですねスムーズに接続するように地域一体となって人材育成をしていこうという主旨の事業でございます。参加高等学校でございますけれども、この地域は日本でも珍しく水産から農業から商業から、いろいろな専門学校がそろっているということで、石巻北高校、水産高校、工業高校、市立女子商業高校さんの方の生徒さん約20名とあと先生もですね9名ほど参加して頂いております。また石巻商業高校さんは今年生徒参加を募集中ということでございます。応援企業といたしましてこの事業を応援して頂く、企業実習ですとか、技術的アドバイス、あるいは工場見学、とかですね職業講話をですね確認で頂いてる企業さんが食品製造、飲食業、金属加工、建築業、ハローワークなど今のところ15社程度参加して頂いております。裏面でございますけれども、事業内容といたしまして、これは昨年度から実施しておりますが、管内の専門高校生がそれぞれの学びの強みを発揮しながら、他校の生徒や地元企業と連携して商品を開発しています。商品開発のテーマは米の消費拡大と魚食文化の発信という大きなテーマでやっております。25年度につきましては、北高で作っている米粉の生地とですね、水産高校の魚醤入トマトソースを使って鯖のホワイトソースとホタテのオーロラソースをトッピングしたピザを制作いたしました。11月に行われました産業教育復興フェアとサンファンフェスティバルで試食提供いたしましたアンケートも実施しております。成果発表会後の感想でございますけれども、一部紹介させていただきます。生徒さんが学んだ事ということで、作る側と食べる側の意見を聞くことが大事だ。そのためにはコミュニケーションを取ることが大事ですね。あと分からないことを質問することが大事だということが分かった。たくさんの人と交わることで自分の意見をい

うようになりましてということです。先生からの意見といたしましては人と接することの難しさや大切さを感じ、意識が変わり学校でも生徒さんが前向きに取り組むようになりましてということです。あと生徒達は物作りは自分本位ではいけないということに気づいたという感想でございます。企業さんからはコミュニケーション能力の向上を知った、数ヶ月でこんなに成長するとびっくりされておりました。今年度につきましては11月の全国産業教育フェア宮城大会でも新商品のお披露目を目指して現在試作品の製作を進めております。今年度も企業様と連携いたしまして技術支援、企業視察、職業講話等の支援を受けながら活動をしていく予定でございます。下の図は各高校さんのミッションを書いております。それから全体でやるのはコンセプト作りですとか、販売価格の設定とかパッケージデザインはみんなでやろうということで、現在作っているのは石巻らしいコロッケ、せんべい、パンというこの3つを中心にやっております。先日水産高校さんで、試作しておりましたホヤのクリームコロッケは大変おいしいものでございました。それで今後ともですね、産業人材の育成と商品化に向けて頑張ってもらいますので皆様のご支援を頂きたいと思っております。以上でございます。

大泉会長 はい、ありがとうございます。それではここで少しみなさんからご意見を頂きましょうかね。まあ時間の関係もあるので一言ぐらいずつになるかもしれませんがいかがでしょうか。なんか話を伺っているとあれですかね、震災を契機にして産業教育とそれから地元の様々な産業とが連携ができればはじめたという感じになるんでしょうかね。そういう雰囲気、いろいろ報告の中に端々に見えるような気がするんですけども。どうでしょうかね。ま、誰が答えるかっていうのもあるのでこういう質問は難しいのかもしれないですけど。ちょっとご質問させて頂きたいのはその海関係の就職で、60でしたっけ？これ増えたんですか。

岡島教頭 航海類型というものがあるんですけども、今年はこの生徒が20名卒業した中で18名が水産関係とあと船に乗った数がですね9名。

大泉会長 9名なんだ。航海関係のになれてるのは。そうでしたか。

岡島教頭 今までから見ると、専攻科に進むとか船関係に進むとか、あと役所の船に乗るとかいうところで増えております。形としてはですね、専攻科にあがって船の資格を取って、そして航海士として乗るという色合いがちょっと強くなってきたのが震災後の大きな変化かなとは思っております。

大泉会長 震災後に校訓を言いながら唱えながら、まあその団結心も固くなるし、まさにその志教育というか、そういうことも明確になってきてるし、それから社会との連携も強くなってきている、社会というか産業界ですか。水産高校の

一番昔から課題としてきた船に乗る人も増えてきているという感じなんではないかな。それで一言申し上げさせて頂くとすると、それは非常に結構なことで今後もどんどんどんどん進めて頂きたいと思うのと、どう言ったらいいんでしょうかね。船でもそれから漁法でも、魚の取り方でも養殖でもそんなんですけど、世界でどうなってるかってあたりね。せっかくその三陸は世界3大漁場のひとつだし、それから世界第6位の予算を持っていたり、海岸線もそうですかね。そういうその魚国家、水産国家だという風に思ってるんですけど、そういう中で世界との関係ではどうなってるのかなっていう教育もおりにふれてねやって頂くとありがたいかなあと。例えばある意味でプロジェクトなんかでも、カナダだとかチリだとかノルウェーだとかいろいろな所の先生方、人を招いて話聞くっていうのがいいのかもしれないなと思うんですけどね。意見ですけど、他の先生どうですかね。

本図委員

今日は、コーディネートして頂くの大変だったと思いますけども、どうもありがとうございました。生徒さん達先生方がいきいきとしておられて、楽しんでおられるなあと、これだったら生徒さん育つなあっていうような感じで拝見させて頂きました。6次産業もなるほどなあと思うんですけども、頑張りたいなあと同時に、たぶんそれなりに、いろいろ課題も多いんだろうなと自分でいろいろやっていくというようなことになっていくと、いろいろ大変だろうなというようなところもあって、そういったところ今後卒業した学生支援とか同窓会とかの強化とか、あと地域連携会議はあるんですけどねすでに。それもすばらしいなと思いました。

岡島教頭

まず地域連携の方からお話ししますと、会員は石巻商工会議所の会頭さんをはじめ、魚市場の社長と、あと漁業組合長さんとかそういった方々の27名で構成しております。今2回、準備会入れて3回開いて来月最後の予定をしております。やっぱりそこで言われるのが、生徒をどんどん企業に寄越してくれと。そして新しいものを見せろと。きつい言葉もあるんですよ。教員は大学卒業して世の中知らないんだから。教員が出てこないと学校始まんねえんだと、こういうことを言われています。それで生徒を寄越せと言われて面倒見てやるからというところで、去年から動き出しています。実を言いますと先生方も今までのパターンがあるので、なかなかこう動きが取れなかったんです。だから交流を取ってしていますと、そんな話が出てくるといったからにはいかなきゃなんない。という事もありまして、少しずつ前に進んでおります。ですので、今年来年辺りはこれを立ち上げたのでちょっと変わってくるのかなというところは、楽しみにはしてる場所なんですけど。あとは同窓生なんですけど、やはり地域の重鎮な方が卒業生は多くてですね。そこら辺のネットワークをもうちょっと広げてあとはその方々に支援を頂ければとも考えております。

本図委員 中学校などとの連携とか、中学校・小学校への水産高校さんの資源を提供するってというような場面はございますか。

岡島教頭 それはもういとわなく、きたらもうやろうというところで動いております、実際にあの学校紹介のオープンキャンパスとあとオーシャンキャンパス、2回やってまして、海の日に中学生等集めて、宮城丸に乗せたりとかですね、あとは簡単な鋳物作ったりキーホルダー作ったりとか、そういったところでいろいろ対応しています。

鈴木主幹教諭 やっぱもうちょっと出前授業とかそういうのを強化していく必要性があんのかなあとは思っています。

本図委員 そうですね。はい、ありがとうございます。

伊東委員 海の方の実習棟には行ったことがなくて、ああこんな風になってたんだなあ思っていましたけれども、まるっとの高高連携のところではうちの学校の生徒も仲間に入れて頂いて、一緒にやらせて頂いておりますけれども、私もうちの教員にとにかく生徒も先生方も外に出ようという話をしているんですね。今は震災があってなんとなく大変な事が多いので、学校の中をとにかくなんとかしなくっちゃってというので内向きになりつつある所があるので、少し落ち着いてきてるのだから生徒も外に出して、外の教育力を活用しましょうというようなことを言っております。だから先生方には生徒が元気に活動するためには先生の方が元気じゃないと元気に活動できないから先生方も元気にやりましょうって話をしてるんです。そんなところでいろんなところで他校の生徒と交わることも大事だし、教員じゃない大人と高校生が交わる事っていうのはすごく勉強になって大人になるっていうことがあるので、大事にしていきたいという風に思っております。

大泉会長 ありがとうございます。産業教育審議会の大きな課題として、その地域社会とのつながりっていうのが、特に産業を通じた地域社会とのつながりっていうのがあるんですけど。今日の話もそうですし、それから農業高校の話の時もそうだったんですけど、いろんな企業がその支援にきてるとい風なこともあり、それから石巻北高に行ったっていうのもこれも不幸中の幸いなのかもしれませんね。農業関係の高校と一緒にやれるようになって商品開発をするようになったこともこれはまあ産業教育としては、外に打って出るっていうひとつの大きなモチベーションになるのでそういった教育がこう歯車がかみ合ってきてるなという感じはするんですけど、そういう意味では非常に良く頑張られてるなと思いました。それでいろいろご意見あろうかというふうに思いますが時間もあれですので、事務局からですね今年11月に開催される24回全国産業教育フェアについてちょっとお話を頂きましょうかね。

佐々木課長 ではありません。簡単にお話をさせていただきます。

補佐 カラーのパンフレット、それからさんフェア通信と2枚配布頂きました。この大会ですが、全国の専門高校などの生徒がその学習内容を発信するという  
ことで、その魅力的な教育内容を理解して頂くということで、新たな産業教育  
の在り方を探り時代に即した産業教育の活性化につなげるため、全国持ち回  
りで今年第24回目の大会として宮城県で開催いたします。開催予定日はパ  
ンフレットにあります通り、11月8日土曜日、9日日曜日の2日間になり  
ます。名取市を中心に県内5つの会場で開催いたします。この宮城大会は大  
会の目的に加えまして東日本大震災からの復興に貢献する人材育成の現状と  
合わせて全国からたくさん頂きました支援に対して、感謝の意を表すという  
大会にする予定でございます。大会規模でございますが、全国から約500  
校。総勢10万人以上の参加を見込んだ大会でございます。お集まりの皆様  
にもぜひご来場頂ければと思います。以上でございます。

大泉会長 ありがとうございます。これは11月の8日9日になりますので、よろし  
くお願いいたします。それでは、ご意見もあろうかとは思いますが今日頂い  
た意見は議事録としてまとめて頂きですね、事務局から皆さんの方へ送り、  
確認をして頂くことにいたします。審議は以上で終わりたいと思います。そ  
うなるとあとは事務局へお返しします。

進行 大泉会長ありがとうございました。それでは事務局からは何か連絡はござい  
ますか。

佐々木課長 1点のみお願いします。委員の3名の皆様に対してのお願いなんです  
補佐 が、はじめに資料の説明の中にありましたFAX送信票があったかと思いま  
す。短時間での話し合いということでですね、疑問な点多々あったと思いま  
すので、お帰りになりましてから申し訳ありませんが何かありましたらご記入  
頂いて事務局の方までご送付頂ければということでよろしくお願いいたしま  
す。以上でございます。

進行 本日は大変ありがとうございました。それでは閉会の挨拶を教育次長鈴木洋  
が申し上げます。

鈴木次長 本日は長時間にわたりまして現場見学とご審議を頂きましてほんとうにあり  
がとうございました。水産高校では平成24年3月に頂いた答申を踏まえま  
して、6次産業化への取り組みや多様なビジネスに対応できる人材の育成を  
進めております。社会に出ますと、創造性あるいは専門性を求められますが、  
その基盤となる人間性も磨いていかなければならないのではないかと思  
っているところでございます。本日は委員の皆様に加えまして、県漁業協同

組合石巻湾支所長様や東部地方振興事務所の皆様からも情報提供頂き、それぞれのお立場からご意見を頂戴できました。本当にありがとうございました。今後も宮城県の産業教育の改善・充実のためにご指導、ご助言を頂きますようお願いをいたします。最後に本審議会の会長としまして10年間ご尽力を頂きました宮城大学特任教授の大泉一貫先生にはこれまでたくさんのご意見と答申作りにお力を貸して頂きました。期間の定めによりまして、委員としてご審議頂くのは今回が最後ということになりますが、今後とも本県産業教育についてご指導を頂ければ幸いです。ご参会の皆様、本日は本当にありがとうございました。

進行

以上を持ちまして平成26年度第2回産業教育審議会を閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。